それゆえ、フランス改革派と現代社会との相性については、それがいつも良いわけではないことは、容易に理解できます。現代社会は、出版・ラジオ・テレビといったメディアゆえに、実際には、可視的で共同体的な宗教形態に有利だからです。この点において、カトリック教会の方が、現代フランスにより親和的です。教皇がメディアにおいて重要な役割を果たし、また、カトリシズムはスペクタクル的な要素を採用したがるからです。プロテスタントは、教区においても、また全国組織においても、ただ一人の長というものを欲しません。現代的メディアが宗教的事件を取り上げる際には、ひとりの長が全プロテスタントを代表して語ることを求めますが、そのようなことは不可能なのです。

しかし、フランスにおいて、プロテスタントではない人をプロテスタントに引き寄せているものは、目立ちたがらず、メディアや制度による権威の行使を好まないという、まさしく、この性格なのです。今日、プロテスタントは、集団的権威よりも個人と個人的良心の尊重を重視するキリスト教の形態として、現れています。歴史的遺産に由来するこの性格は、個人主義の根強いフランスのような社会においては、ひとつの切り札です。しかしこの性格は、プロテスタント教会の、統一や可視的性格や集団的発言を弱める結果をも、もたらしています。

b．教理的分裂

教理的分裂は、たとえ19世紀における程の重要性はないにせよ、やはり過去の遺産の重要な要素です。いくつかの事実を参照しましょう。19世紀には、フランス改革派とその教会において、深刻な教理的分裂が進展しました。ゲルマンやアングロ・サクソン諸国の状況と同様に、正統主義が自由主義に対立したのです。正統主義は、カルヴァンの宗教改革を継承し、ラ・ロシェル信仰告白において表明された、伝統的教理の維持に、好意的でした。自由主義は、18世紀の啓蒙思想の影響を受け、反対に、すべての拘束的な教理定式の放棄を望みました。両党派は、19世紀に対抗的に組織され、信徒の深い分裂をもたらしました。しばしば教区単位毎に、正統主義であるか、自由主義であり、どちらの側にも付くことを拒否する第3のタイプも現れました。そのように、個人や教区が結集する3つの傾向があり、それぞれに組織化がなされたのです。1872年にシノッドの再開が可能になった時、取り返しのつかない事態が起こりました。神学的分裂は、もはや柔軟なやり方で解決されることができず、分裂は決定的となり、統一は失われたのです。それが回復され、単一のフランス改革派教会に再統合したのは、1937年になってからであり、その状態は現在まで続いています。

この統一は、双方の譲歩の上に築かれています。正統主義側は、新たに信仰内容を宣言（proclamation）する場合、それが過去の信仰告白（特にラ・ロシェル）を参照することを得、自由主義側は、牧師に対し、過去の信仰告白への同意を要求せず、ただ新しい信仰の宣言への同意のみを要求することを得ました。ただ、いくつかの教区（とりわけ南部）はこの統一に加わることを拒否し、今日、別の組織を形成しています（一万二千人）。再統合については、1937年の合意により、今日、状況は安定化したといえるでしょう。正統主義と自由主義との対立は、消滅するまでに相対化されたので、神学的傾向の多元性がもはや常態となりました。これらの神学的諸傾向は、19世紀のように教会の党派を形成することはなく、敵対せずに、改革派信仰の多様な側面と傾向を表出しています。

しかし、神学校については、改革派における、正統主義と自由主義との間の古い分裂の遺産が、残っています。フランス改革派教会とルター派教会は、事実上共同で、2つの神学校を維持しています。一つはパリ、もう一つは南仏のモンペリエにあり、これらの神学校は、1937年の合意の線に沿うものです。しかし南仏のエクス・アン・プロヴァンスには、もう一つの、より小さな改革派の神学校が存在します。この神学校は、特に、聖書と伝統的信仰告白の占める位置に関して、より保守的で厳格な神学的立場を表明していますが、ここを卒業した牧師は、統一された改革派教会にも、1937年の統一を拒否した教会にも派遣されています。